

「あの道もこの道も」

詩編 1 編 1-6 節

2026 年 9 月 27 日

今月は信徒の方の証し月間として、神様の豊かなお働きをお聞きすることができた1ヵ月となりました。トップは織田義郎兄から韓国で伝道されたお父様のお証し、そして新会堂 19 周年記念の日は、丁度、会堂が建てられた年に誕生された近藤希実姉のお証し、ラストとなった本日は、石本喬子姉のこれまでの長い人生経験の中でのお証しをお聞きすることができました。何と恵み豊かな1ヵ月だったのでしょうか。神様はこのようにその週ごとにぴったりの方を選んでくださったと改めて感動を覚えるものであります。さて、先週は、「敬老の日」でしたので、本日は一週間遅れであります、私たちの信仰の大先輩の信仰を見つめながら、敬老感謝礼拝としてお捧げしたいと思います。

神が知っていてくださる二つの道

今朝開かれた聖書では、「いかに幸いなことか・・・」という言葉で始まっています。詩編は全部で 150 編ありますが、この「いかに幸いなことか・・・」と、神と共にいる幸い、そのような強い確信がこの詩編 150 編の初めの言葉、一言で詩編を表現されています。詩編には、信仰者の様々な苦闘が表されていますが、苦しいけれども示された道を神と共に必死に歩んできた、苦しみや悲しみの最中にあって、それでも神に依り頼んできた信仰者の確信、その初めの言葉が、「いかに幸いなこと」という言葉となっています。

先ほどは、詩編 1-6 節が読まれ、二通りの生き方が記されています。一つは神に従う者の道。もう一つは神に逆らう者の道。そこにはどちらか一つの選択肢しかないと言っているように思えますが、人生を振り返ってみますと、私たちは、これまで従う道だけを歩んできたわけではないし、逆らう道だけを歩んできたのでもないと思います。

調べてみますと実際、一つの選択肢しかないと言っているのではないようです。ヘブル語の原語によると、この詩編の筆者が伝えたいことは、従う者の道も逆らう者の道も神は知っておられる、ということです。人生を思い返すならば、時には神に叶った道を歩むことができた、神が喜ばれることもできた。また一方で、ある時は悪しきに道に足を踏み入れたこともあったといえます。つまり、あの道もこの道も歩んできているし、また歩んでゆくことでしょう。しかし、確信していえることは、そのどちらの道にあって、神は共にしてくださった、神は私たちの全ての道を知っていてくださる。そのようにこの詩は歌っているのです。

私たちはそれ以上に神に逆らう者の道をイエス様は知っていてくださる。そのような歌を歌うことができるのです。神の愛はこの世の悪や罪よりも強いのです。イエス様が十字架において証ししてくださった永遠なる真理、永遠に真実な神の愛の方が強いのです。その神の愛が、悪しき道、滅びる道しか歩むことができなかった私たちを救ってくださいました。ですから、私たちはこの詩よりも、もっと恵まれた感謝の歌を歌うことができるのです。この命を丸ごと救ってくださったイエス様が私たちの人生と共にいてくださる、ということをもっと素晴らしい賛美をすることができるのです。

枯れない葉

そのようにして賛美し祈りながら歩んでこられた信仰の先輩方が教会には沢山おられます。先ほど、「人生の海の嵐に・・・」と、賛美しました。長い人生の中、荒波に吞まれそうになった時もあったで

しょう。正に嵐の中、潜り抜けた人々の姿が2-3節に記されています。「主の教えを愛しその教えを
昼も夜も口ずさむ人。その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び葉もしお
れることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす」と記されています。イスラエルの地
は、年間の半分が乾期で、植物も自然の水源がなければ成長することができません。この木は頑
張って自分の力でそこに植えたではありません。神がそこに置いてくださったのです。せせらぎから
水を十分に得て、根をしっかりと張り、時がきて実を結んでおられる方々のお姿を私たちは見せて
頂いているのです。雨や風があっても倒れない木、水と栄養がしっかりと行き渡り、枯れることはな
く、そうやって苦しみを乗り越えていく、積み重ねた信仰の年輪があります。

詩編の詩人も神にしっかりと結びつた信仰をその木に見たのです。その葉が枯れないのは、そ
の木の手によるのではなく、それに命を与える神の働きと力によるものです。「その人のことは
すべて、繁栄をもたらす」と訳されていますが、原語では「その人は、何をしても栄えさせられる」と
受動態で書かれています。その人は、喜びながら神と共に歩んでいるから栄えないことがあり得な
いということです。

神から見て罪のない人間など一人もいません。イエス様から目を離さなかった信仰者の豊かな
実りが教会の宝です。神の御言葉を何よりも喜び、楽しみとし、礼拝を離れなかった、この世の荒波
を潜り抜けて必死に真剣に生きる信仰の先輩方のお姿から私たちは学ばせて頂いています。年輪
を重ねた信仰者の顔、姿であります。その人々が私たちの教会の実りに他なりません。年を重ね
益々キリストのものとされてゆく実り、流れのほとりに植えられた木には豊かな実をたくさんつけてい
ることでしょう。それを共に味わう私たちは幸いです。